



e-La Voz

「エー・ラ・ボス」と読みます

HCJB『アンデスの声』
日本語放送
メールマガジン
(第21号)

2004年7月30日発行

「アンデスの声」40周年記念番組感想文集（敬称略）

キトからの60分放送・第一声は尾崎道夫さんの肉声よりスタート。ひさしぶりに拝聴してとても懐かしくおもいました。ラファエル君、作さんのごあいさつに交えて道夫ファミリーからの歌のプレゼント、アンヌマリーさんの美声、リンダ・ジョイさんとメロディさん、おふたりのかわいい歌声に、私たちはうれしくなってただ聞きほれていました。そのあとシカゴでのインタビュウ番組がつづきましたが、なによりもうれしかったのは久子夫人の元気な肉声を聞くことができたことです。（キム・ヨンイル＆富子）

声には文字では伝わらないなにかがあるようです。インタビューでは、シカゴで精力的に活躍されている人たちのことが伺え、人には信じられない出会いや運命があるのだなと感じました。ふりかえってみると、自分にも色々なことがありました。でもいつもその中で、どうしても大きな流れ(組織)の中にいなければ、またはその流れから外れたら、もうその人は終わりのような錯覚を覚えていましたが、そんなことはない!という声をこの放送からきいたような気がしました。聖書のなかにも「求めよ…」で始まる言葉があったようですが、それを実践された方を見習いたいものです。(渡部 和雄)

小生は60才半ば、学生時代にはHCJBを拝聴していました。当時受信報告として録音テープをお送りしたところ「真夜中の列車」の曲を入れて返送していただいたり、ブラジルの新生農場の子どもたちのスケッチ画をいただきましたが今も保存しています。その子どもたちも30代になるはずです。世はインターネット時代、諸外国の放送も安定して聞こえるようになりましたが、短波に乗ってきこえる「アンデスの峰をこえてお送りするこちらHCJB…」を懐かしく思う次第です。（大町忠久）

パリでは、北駅前のホテル4階で受信を試みました。SONYの折畳みアンテナAN-LP2を窓に貼り付けて、ICF-SW07で受信しました。ひさしぶりに短波で皆様のお声を聞いて本当に感激しました。最後の曲(コンドルは飛んで行く)を聞いて、「ああアンデスだ」との思いを強くして、はるか欧州からの受信報告をしたためました。一年ぶりの短波放送をありがとうございました。(大武逞伯)

ロシア極東部にプロジェクトのため長期出張中の40才日本人です。今はナホトカの近くのトレーラーハウスに娯楽もなく、BCLを数十年ぶりに再開したものです。ロシアでは状況は良くなく残念におもっていましたが、さすが技術は日進月歩、オン・デマンドという利器がありました。大喜びで記念特別番組を60分と30分を早速拝聴しました。昔必死に聴いていた放送がこんなにクリアにきこえるなんて！（伊藤均）

便利ですね。40周年記念番組はオン・デマンドで拝聴しました。都合の良いときに、しかも繰り返し聞けます。すばやく準備を整えてくださった関係各位のご努力に感謝します。関口会長、岡野社長のお話は、40年という時の流れをふりかえる特別番組にふさわしいものでした。それぞれ人生には山あり谷ありというご苦労あっての今日なのですね。（小林哲郎）

短波放送独特の雰囲気と温かな視線で構成された40周年記念番組でした。インタビュウを受けた人々が歩まれた人生を垣間みることができ励まされました。これからもお体を大事にされて人々のこころの支えとなる活動を続けてください。41周年記念放送も楽しみにしています。（黒田正美）

私、忘れたでしょ。3年4ヶ月ぶり、11通目のお手紙です。なんと言ってもまた「アンデスの声」が聞かれるのが信じられません。うれしいです。元気が出ました。私としては、やっぱり「マリンバの調べ」です。昔の録音テープをきいてマリンバの音色が流れると、なぜか尾崎ファミリーの笑顔がうかんでくる今日このごろです。（蓮見喬司）

一番うれしかったことは、奥様のお声を聞くことができたことです。元気になられてよかったです。海外で活躍されている方々を紹介いただきましたが、聞いていて世の中、頑張れば頑張っただけのことはあるんだなあ、みんな偉いな、と思いました。「ここにこの人あり」というタイトルでしたが、「ここに人生あり」という風に感じました。インターネット放送はすごく受信状態がよいので(当たり前ですが)、ある意味ではリスナーにしっかり聞いてもらえたのではないかと思う。 (伊藤慶彌)

40周年といえば、放送開始当時は私はまだ赤子、そしてHCJB初受信は13才の時、今や42才の中年です。渡米して大変な苦労をされ、激動の時代を乗りこえられた関口公秀さんには感動しました。そんな苦しみの中での教会との出会いもよく納得いきます。どこで、私が学生時代お金がないときに、知人からいただいた冷蔵庫がアメリカ「シアーズ」製、私の貧乏生活を「シアーズ」に救われたと言えるかもしれません。関口さんとは比較にもなりませんが、懐かしい名前でした。 (松本卓也)

ひさしぶりの「アンデスの声」を聞くことができ非常にうれしかったです。今回の放送は、埼玉県上尾市の渡辺秀貴さんと岩手県久慈市で中南米DXをした際に極めて良好に受信できました。(AOR AR 7030+180m ビバージ・アンテナ) シカゴでインタビュウされた今日の3名の方々のご苦労話や趣味のお話、楽しかったです。私も仕事で海外に出かけることがあります、実際に現地で生活するとなると並々ならぬご苦労があることがわかりました。次回の放送もぜひ聞きたいと思います。 (上村幸治)

日本語放送スタッフの皆様のお声に心の安らぎを感じました。シカゴ・レポート「ここに、この人あり」でインタビュウを受けられた方々の人生経験は、私にとって人生の貴重な教訓となりました。本当にすばらしい放送をありがとうございました。来年も楽しみにしています。 (川添充則)

シカゴの実業家関口さんとの対談はドラマを見るようで興奮しながら聞き入りました。とはいえた関口さんですら道に迷い、先が見えないときがあったと聞き、現在の私の心境とあわせて、同じような心の平安が私にも必要だと思いました。小針家訪問もよかったです。とくに普通のサラリーマンから牧師になっていく話に興味をひかれました。また奥様とふたりのお嬢様の天使のような歌声にはこころ癒されました。とてもきれいでした。 (高田寛陸)

オーストラリア送信の放送では、ご次男の祐二さんご夫妻が出演されて驚きました。お声がお父様に似ておられ、オーストラリアの様子をお話くださり、おふたりの掛け合いもとても楽しかったです。関口さん、岡野さん、小針牧師さんがクリスチャンになられたきっかけなどのお話をとても興味深く聞かせていただきました。カーンズさんのアマチュア無線交信の様子も興味がそそられました。私もアマチュア無線免許を持っています。また、英語放送「DX Party Line」に電話出演された尾崎さんの番組もきました。日本語放送の歴史をわかりやすくお話くださり、手元にあるマガジンランド社発行の「アンデスの声リスナーズ・アルバム」の写真をめくりながら、目でも耳でも理解できました。この番組には私も出演して英語でDX情報を流してもらっています。日本発信の情報を世界中の人たちに伝えたいとの思いで、昨年9月からはじめました。多くのリスナーに聞いていただければと願っています。 (辻由紀子)

オーストラリアからの祐二さん夫妻のオープニングで、一瞬「こちらはアンデスの声です」と、やっていましたね。あれは間違いなく尾崎さんご本人の録音された声だとばかり思っていましたが、祐二さんの声だったのですね。混信とノイズの中から聞こえてきたときにはてっきり…。だまされました。今度の放送はクリスマス? 来年の5月でしょうか。 (高城洋太)

次男の祐二さんが、本当にこの特別番組にあわせたかのように、うまい具合にシドニーに転勤になって驚かされました。また、「ここに、この人あり」はシカゴ版「赤道で会いましょう」といったところでしょうか。来年も日本語特別番組がきっとあると信じています。 (鈴木英夫)

毎年恒例の行事のように放送開始をワクワクして待っていました。私も祭好きの日本人なのでしょう。季節の風物詩のように「アンデスの声」をきかないと物足りません。今年はオーストラリアからとシカゴからの二元放送で家族の絆のようなものを感じました。ISのオーストラリア先住民のアボリジニ音楽もいい雰囲気でした。年一回のHCJBの日本語短波放送は定着したものだと思っています。また来年もお願いします。 (師岡茂基)

1974年からHCJBは聞いていますが、お便りは数十年ぶりです。私は41才、自営業です。40周年の放送はとても楽しく(というか懐かしく)感じました。わたしもインターネットで聞いたことがあります。実際尾崎さんの声が優しく感じられました。しかし、昨日のような短波放送では、その声がとても力強く感じたのです。まるで、荒波のなかをこちらに向かってくる一隻の小船のイメージでした。自分の手を使い、耳を使って放送を聴くということが、いかに人間らしいことかと再認識させられました。もう一度、現地からの放送をというのは無理な話かもしれません、せめて不定期でもかまいませんので、日本語番組が続けてこれからも電波に乗ることを切に希望いたします。 いつまでもお元気で。 50周年! の放送も期待しています。 (富岡正範)

あとがき：「アンデスの声」40周年記念特別番組をおききくださいありがとうございました。リスナーの皆様の熱心な受信ぶりと正確で緻密な受信報告書は、エクアドルでもオーストラリアでも英語部担当者が高く評価しています。受信報告書にそえて番組内容に関する心あたたまるご感想もお寄せいただき、感謝のことばもありません。ここに皆様からのお便り、メールを一部転載させていただき、HCJB日本語放送40周年の記念石として残したいと思います。

HCJB日本語放送担当

在住 尾崎一夫 久子

【ホームページのご案内】

HCJB日本語放送のホームページ(<http://www.hcjb.org/japanese/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「フォーラム」(<http://www.hcjb.org/japanese/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「メールマガジン e-La Voz らいぶらり」(<http://www.hcjb.org/japanese/mmz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。

このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録は、下の該当ボタンを選択し、必要事項をご記入の上、[この内容で送信する] ボタンをクリックして、手続きをお願いします。なお、**Netscape 6.2以降をお使いの場合、このメールマガジンに埋め込まれているご登録手続きの機能はご利用いただけません。**ご面倒ですが、[HCJB日本語放送](#)まで別途メールにてお知らせください。

配信の停止 **(※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)**

配信変更先のメールアドレス
(※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

新規登録するメールアドレス

※お送りいただいた内容はメールリスト・サーバにより自動的に処理しますので、余分な内容は一切入れないでください。
※このメールマガジンはコンテンツが大きいため、携帯電話への配信はできません。

Copyright © 2004 by HCJB. All rights reserved.



日本語ホームページ: <http://www.hcjb.org/japanese/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki
1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.
